

第17回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



中学生の部 優秀賞 受賞作品

『マイペースに生きる』

オーストラリア
パース日本人学校
中学部一年 横山 克樹

マイペースに生きる

パース日本人学校 中学部一年
横山 克樹 (よこやま かつき)

私が初めて寝返りを打ったのは生後八ヶ月の時だった。ハイハイも遅かった。やっとつかまり立ちをしたのはナント生後三百二十七日だった。家族はかなり心配したそうだ。しかし、喋り出すのだけは早かった。ちなみに弟は三ヶ月で寝返りしたらしい。

幼稚園では、自分が勝てない競争、特にかっこはワースト一位に入るほど嫌いだった。運動会でも一人だけ踊らず、突っ立っていた姿が写真に残されている。周りが外遊びをしていても、私は毎日絵を描き、本を読んでいた。恐竜と飛行機が大好きで、博物館に行けば、弟が待ちくたびれるまで好きな展示物の前に居続けた。

小学校に入学しても、相変わらず読書に没頭し、さらに、プラモデル制作に熱中するようになった。近所の模型屋に通い、店主のおっちゃんと仲良くなった。店主のおっちゃんは、色つき丸メガネに長めのヘアスタイル、ニット帽、懐中時計と弾丸のついたネックレスを身につけ、オーバーオールを着こなす一風変わった人だ。おっちゃんと私は乗り物の話題で意気投合し、時間を忘れ、日が暮れるまで話し込んだ。

「零戦を緑じゃなくて赤とか黄色で塗ってもいいねん。好きなようにやろい。」
という言葉は、常識にとらわれないおっちゃん自身を表しているみたいだった。そこにいる時間とプラモデルを作っている時間だけは解き放たれたような気分になった。飄々としていて、唯一無二のおっちゃんは私の憧れの人物となった。

小学校では、「集団生活の中で守るべきルール」に違和感を抱く事もあったが、六年間で私なりによく協調性の大切さを知ったと思う。しかし、型にはまるのは好きではなかった。卒業文集を書いた時、担任の先生が添削してくれた箇所をどうしても自分の言葉で表現したくて、清書の時にコッソリ書き換えた事があった。

中学生になり、父の転勤で、突然家族でオーストラリアに行くことになった。転校することにはそれほど抵抗は無かったが、模型屋のおっちゃんとはしばらく会えなくなるのは嫌だった。日本を発つ日もおっちゃんに会いに行き、出発の一時間前までおっちゃんと話していた。いつもさっぱりしているおっちゃんだったが、

「手紙書いてや。」
と、レシートの裏に住所を書いて渡してくれた。模型屋に行けなくなることを寂しがる私に、おっちゃんは、

「三年なんかすげや。」
と言って背中を押してくれた。

それからオーストラリアに来て二ヶ月が経った。オーストラリアで暮らし始めて驚くことがたくさんあった。街を歩くと、ダウンコートを着ている人から上半身裸の人まで、様々な人とすれ違う。色々な人種、言葉が入り混じっている。日本では、人とすれ違う時に他人と目を合わせないことがほとんどだ。しかし、オーストラリアでは、すれ違う瞬間に微笑みかけてくれる人が多い。

街中でおしゃれな服を着ている人の足元をふと見ると裸足だったり、シヨッピングカーの力ゴに何人かの子供を乗せて買い物をしたり、日本なら少しびびりされそうな光景

が、オーストラリアでは当たり前のように受け止められている。他人が何をしても自分のペースでいる。だから他人に対してもおおらかなのだろう。

「日本と全然違う！」

自分のスタンダードと外国のスタンダードが大きく違ったので私は衝撃を受けた。

私は、今までマイペースで人と違う事は良い事では無いと感じることが多かった。なぜなら、周りと同じ遊びをしなかったら寂しくしていると思われるか、周りの人と合わせる事が課題だと懇談で言われたりした事があったからだ。しかし、私はオーストラリアに来て、人と違う所があっても何もおかしくないという事に気づけた。寝返りや歩き始めるのが遅くても、今、私は元気に過ごしているのだから。その上、私はマイペースである事によって趣味に打ち込んでいる。そんな風に生きられる事が、幸せとさえ思っている。

この先も、私は多くの出会いと別れを経験するだろう。時には逆境に立たされる時もあるだろう。しかし、私はこれからも自分のペースで、おおらかに生きようと思う。

おっちゃんに手紙を出したい。

「おっちゃん、俺は元気やで。これからもマイペースに進むねん。」

私のキャッチコピーは、「マイペースに生きる」だ。